

『わが恵み汝に足れり』

聖書 コリントの信徒への手紙二 12章 1～10節 讃美歌 16 120 451 579 27

説教 森田幸男牧師

皆さんはそれぞれご自分の聖書、讃美歌を持っておられます。教会員の人には教会の備え付けのものではなくて、自分の聖書、讃美歌を教会に置いておき、そして家で読む聖書はそれとは別にお持ちになるようにお勧めしています。教会の方々は礼拝で使う聖書は教会に置いておられるわけでありますが、求道の方は教会に備え付けのものをご利用になっていると思います。教会に来られて間もない方はそれで結構でありますけれども、長い方はもうここ1年も2年も礼拝に欠かさないで出ておられるわけですけれども、そういう方は思い切ってご自分の聖書をお持ちになるようにお勧めしたいと思います。既に御自分の聖書をお持ちの方もあると思いますけれども。と申しますのは、聖書はこれは一生の宝物になります。

実は今日、一緒に読みたいと思って選びましたこのコリントの信徒への手紙二 12章 1節～10節のこの箇所は、以前にも一緒に読んだことがあります。けれども今日改めてもう一度ここを読もうとしましたのは、実は今、司会者のお祈りにもありましたように、9月10日の日に私たちの教会の木内正子姉が、あの弁護士事務所に勤めておりましたけれども、亡くなりました。わたしの年子の姉でもあるのですけれども、その木内正子姉の遺品の片づけをいたしました。それで今ここに持っているのは、木内正子姉の遺品としての聖書なのでありますけれども、讃美歌もあります。これを先日来読んでいるのですけれども、数枚のしおりが挟んであります。その所を優先的に開いて読みましたところ、この12章の1節以下のところは、鉛筆で強く線を引いてある箇所の一つなのであります。

只今司会者が私たちの神様は、「有って有る者」、これは前の口語訳では神様の名前は、「有って有る者」となっていました。今私たちが使っている新共同訳聖書では、「わたしはある」というのが神様のお名前なんです。「わたしはいる」でもいいのですが。その出エジプト記の3章、モーセが神様によって指導者として立てられるそのとき、「わたしはいる。あなたがこれからする仕事は大変だけれども、わたしがいる。あなたと共にいる」というふうにおっしゃった箇所、そこにも線が引いてあります。わたしがここはと思うところを開いて見ますと、そういうところに線が引いてあるわけであります。

恐らく皆さんの聖書にもそういうふうな傍線を引いたり、アンダーラインを引いたりしているところがあるかと思っておりますけれども、教会で借りた聖書に鉛筆やボールペンでしるしを付けるわけにはいきません。自分の聖書なら遠慮はいらないわけですから、「ここか！」

と思った時に線を引くことができるわけですね。そしてそういうふうにして出会った聖書の言葉が、私たちをどんな時にも支えてくれるのです。

例えば、ここにもしおりが挟んでありますが、イザヤ書 46 章の 4 節ですけれども、これは神様のお言葉です。「わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負って行こう。わたしは、あなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。」ここにも強く線が引かれてありまして、その箇所の上の上部余白には、「2002 年早春に出会う」という書き込みがあります。この御言葉と、このようにおっしゃる神様と、木内姉が洗礼を受けられたのは 1999 年の 4 月 4 日ですから、還暦の誕生日、その年のイースターの日であります。そのように信仰を与えられたのはもっと先ですけれども、2002 年の早春にこの御言葉に出会ったのです。1138 頁の最初のところですが、このようにして、もう一度このようにおっしゃる神様に会ったのだと思います。そのようなことでありますので、是非皆さんもご自分の聖書を持たれて、遠慮なく線を引かれるとよいと思います。

それで今日の箇所のどこに線が引いてあるかと言いますと、「わたしの身に一つのとげが与えられました」という「とげ」のところに濃く線を引いて、そして矢印をして欄外に、「くさび」と書き込みをしています。これは恐らく私たちがここを前に読んだ時、「とげでもあるけれども、くさび、杭と言ったほうがいい」と言ったからでしょう。ここは実は「杭」という言葉が使われているわけです。「杭」とか「とげ」とか、それから魚を釣る「釣り針」という意味もあるのです。杭というのはいろんな使い方をしますけれども、木の先を尖らせて打ち込む「杭」、或いは「楔」、「とげ」そして「釣り針」。この言葉にはそういういろんな意味があるわけです。

パウロの肉体に一つのとげが与えられた。それはサタンの使いである。「神様、これを取りのけてください。わたしから去らせてください。いやしてくださいと、わたしは主に三度願いました。」こういうふうにはパウロは言っていますから、それは辛抱できない痛みであったのだと思います。それはパウロの病気を指します。けれども、もしこれを「とげ」と訳したら、“とげぐらいのことで大層な”と思う方があると思います。釣り針には魚を釣ったら、その口からはずれないように仕掛けがあって、中々取れないのです。ですから釣り針が一度ひっかかると取れないで持続する。そしてとげ、私たちはとげがささったら取りますね。わたし達の聖書は翻訳です。聖書を訳す場合、その語にいくつも意味があれば、そのうちのどれか一つ取って訳すわけですが、釣り針の意味もあるし、とげの意味もあるし、杭、楔の意味もある。恐らくこの全部をパウロは経験していたと思うのです。だからとげがずーっとチクチクしているというか、釣り針が引っ掛かったままでいるというか、そして時に杭を打ち込まれるような激痛になる。ですからどの訳語も意味があることなんですね。要するにそういう病気をパウロは持っていたのです。

ひどい眼病だったという証拠はあります。ガラテヤ地方に伝道したのは、伝道に行こう

と意図したものではなくて、身体の具合が悪くて、もう予定通り前進出来なくて、たまたまガラテヤ地方に身を休めた。それがガラテヤ地方に伝道するきっかけになったのです。そのところをパウロはガラテヤの信徒への手紙の4章に書いているのですけれども、「その時あなたがたはわたしをさげすまず、忌み嫌わなかっただけでなく、そんなわたしを神の使い(天使)か、キリスト・イエスでもあるかのように迎えてくれました。そして、そんなわたしのために、自分の目をえぐり出して、わたしにくれようとさえあなたがたはしてくれました」というようなことを書いております。「自分の目をえぐり出して、パウロ先生にあげたい。そしてこの恵みの福音をもっと多くの人に伝えていただきたい。」ということがガラテヤの人たちが信仰を持った時のことで、ガラテヤ書4章の13,14節に書いています。

そしてその時に、「わたしをさげすまず、忌み嫌わなかった」という、「忌み嫌う」というのは、「吐く」、「つばを吐きかける」とかいう言葉です。食べた物を吐き出す。ある病気を持った人、特に発作を起こす病気を持った人に対して、これは悪霊が取り付いているとして、自分に近づかないように、つばを吐きかけるというふうなことがあったようです。「あなたがたはわたしにつばを吐きかけなかった」ということは、そういう発作を伴う病気をパウロは持っていた。発作というのはいつ起きるか分かりませんが、「そういうわたしをさげすまず、忌み嫌わず、自分の目をえぐり出してでもわたしに与えようとしてくれた。わたしを神の使いか、キリスト・イエスでもあるかのように迎えてくれました。」こういうふうにパウロは言っているのであります。しかしその「とげ」、「くさび」がきっかけで、ガラテヤにあった人たちに恵みの福音が伝えられたのですね。

そういうとげがあって、パウロは三度、「これを取り除いてください」と神様に願ったのです。パウロは我慢強いとかいうよりも、今開いている右のページの下の方の後ろから7行目から読みますと、「労苦したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度、鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度、一昼夜海上に漂ったこともありました。しばしば旅をし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、労苦し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。その上に、諸教会のいろんな心配事がわたしに伝えられる。弱らないでおられませんか」というようなことを書いているわけです。こういう酷い、すごい経験をもパウロは通って来ているわけですから、少々のことでも音を上げるような人ではありません。けれどもこのサタンの使いについては三度、「これを去らせてください」「これを取り除いてください」と、彼は祈ったというのですから、これはとげというよりも、杭というか、楔というか、その発作

が起きたら、さすがのパウロも耐えがたい苦しみをしたのだと思います。

そのようにパウロは祈りました。それに対する神様の答えは9節にあります。「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。」これが神様の答えでありました。

私たちは今、新共同訳聖書を読んでいますから、先ず買われる時は新共同訳聖書をお求めになって頂いて、その次にまた別の聖書も併せて読まれるのがとてもいいと思います。

これは『リビングバイブル』というアメリカで出た聖書の翻訳であります。これによりますと、前に紹介しました9節のところはこういうふうになっております。

「三度も神様にお願いしました。その都度返ってくる答えはこうでした。『いや、治すまい。しかしわたしはあなたと共にいる。それで十分ではないか。わたしの力は、弱い人にこそ最もよくあらわれるのだから』。これがリビングバイブルの訳です。

これは原文から大分離れるのです。このリビングバイブルの成り立ちというのは以前に話したことがあると思うのですが、ケネス・テラーと言う人の訳なのです。この人には小さい子供がいて、夜寝る時に子供に聖書の読み聞かせをして、床に着かせたわけです。子供が数人いて、三歳の子もいれば小学校一年の子も三年の子もいて、同じ聖書を読みながら、彼は聖書学者ですからギリシャ語の聖書を読みながら、それぞれの年齢に応じて、三歳の幼児には三歳の幼児語で、小学生には小学生の言葉で、原文を訳して聞かせるというようなことをしていた人で、その人が“現代人のために”ということで訳したのがこの聖書です。これによりますと今ご紹介しましたように、「いや、治すまい。しかし、わたしはあなたと共にいる。それで十分ではないか。わたしの力は弱い者にこそ最もよく表れるのだから」となります。そしてこれは昔の文語訳ですと、『わが恵み汝に足れり』となっていましたので、今日の説教題にしたのであります。

「恵み」というのは何なのかと言えば、神様が、イエス様が、『わたしはあなたと共にいる。あなたが病気をしようが、あなたがどうであっても、或いはどんな人間であっても、わたしはあなたと共にいる。弱さの極みにあっても、わたしはあなたと共にいる。』これが「恵み」という言葉の意味であります。

わたしもリビングバイブルで最初にこの箇所に出会ったとき、“ああ、良い訳だな”と思いました。東京時代にある修養会でこの訳を紹介しました。その時私が紹介したこの訳にもう一人出会った人がいたのです。実は私の先生の宇田達夫先生が、私がこれを紹介した時におられて、この言葉と、そしてリビングバイブルに出会われた。木内正子姉の葬儀が9月12日でしたが、その一週間後に東京で葬儀がありまして、上京しました。その司式をされたのが宇田先生で、その時にリビングバイブルでヨブ記の7章を読まれたのですが、わたしがこれまで経験した葬儀の中で一番単純なシンプルなよい葬儀でありました。棺は最初から葬儀社から火葬場に運ばれていて、火葬場の小部屋に皆が集まって、葬儀をした

のです。宇田先生はリビングバイブルで、ヨブ記の7章を読まれ、そして故人のことを話されて、そしてお祈りされました。そして火葬なんです。それだけの葬儀なんです。そして故人のことについて話された時に、「私はこの聖書のヨブのような人に一度会ってみたいとずーっと思っていました。あれほどの苦しみを経験し、試練に遭った人、そういう人に一度会ってみたいと思っておりましたけれども、今この棺に横たわっているこの人がそうです」とも話されました。その姉妹と宇田先生も50年来の付き合いで、最深の理解者です。私も45年からの付き合いですから、先生が言われることが理解できます。そしてお祈りして、火葬で、讃美歌も歌いませんでした。けれども、良い葬儀でした。その帰途先生と一緒にお茶を飲んだのですけれども、「実はこのリビングバイブルについては、あなたが昔この箇所を紹介してくれた時に私は出会って、それ以来私は折に触れて読んでいるのです」と、そう言われました。

木内正子姉は今日のところに強く線を引いております。そして次の340頁を開きますと、そこにもう一箇所、「それゆえ」から最後まで、「それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」そこも強く線が引かれています。そしてリビングバイブルですと、「弱さ」というところが「とげ」となっています。「このようなとげも、このような楔も窮乏も迫害も、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために、キリストのゆえに満足しています」と。

前の頁の、「キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」という、この「大いに喜んで」というのも以前にお話したことがあります。これは、「快い」とか「喜ばしい」という形容詞がありますが、それが副詞になって、その最上級、それをもう一回最上級にした言葉です。パウロは時にそういう造語を作ります。「この上なく喜ぶ」と言うのです。何故なら、パウロは十四年前に第三の天に上げられた人を知っている、とこういうふうに言っています。これはパウロは自分の事を語っているのですけれども、正に別の人を見るように語っているのです。

十四年前といったらいつ頃かと言いますと、この手紙が書かれたのは紀元58年頃だと、研究の結果言われています。それから14年前というと44年頃になります。そしてパウロの回心は大体紀元30年頃と言われます。その回心時に「キリストの啓示」を受け、彼はクリスチャンになりました。それから14年くらい経った時に、第三の天・楽園に引き上げられる経験をしたと言うのです。この「楽園」は以前の口語訳では「パラダイス」となっていました。今回は「楽園」となっています。旧約聖書では、これはアダムとイブが住んでいたエデンの園の「エデン」という言葉で、これは「喜び」という意味です。「その楽園に引き上げられた。それはこの体のままか、体を離れてか知りません。そこへ上げられて、人が口にすることが許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。」そういうふ

うにパウロは言っています。ですからこれは最初の回心の時ではありませんね。それから14年経った時、44年頃それからまた14年経って、この手紙を書いているという、こう言う次第なのです。

その経験は、「体のままか、体を離れてかは知りません」とパウロは言います。ちょうど今日の聖書の箇所の上、何何の難に遭った、何何の難に遭ったということで、鞭でも打たれ、石でも打たれ、気絶するような事も何度かあったでしょう。ですから、この体のままか、体を離れてか知りませんというのは、今日の言葉ならこういうのを「臨死体験」と言うのだと思います。

「第三の天」というのは、天の一番高い所、そしてパラダイスというのは喜び、先のエデンからの言葉だと言いましたけれども、この言葉自体は「庭」なんです。「庭園」を指します。パラダイスというのは「楽園」となっていますから、「喜び」と「庭園」と結び付けた良い訳ですね。これは王の庭なんですね。王宮の庭、其処にルカなり何なりを招いて散策し、労に報いて御馳走をする、そういう庭園がパラダイスなのです。これが神様のおられる天の庭で、そこへパウロは引き上げられた。そういう経験もあるわけですが、また、弱さの極みに引き落とされた。そういう中で耐えきれなくなって、「この苦しみから解き放ってください」と繰り返し祈った時に、今の答えが与えられたのですね。

『いや、治すまい。しかしわたしはあなたと共にいる。それで十分ではないか。わたしの力は弱い人にこそ最もよく発揮されるのだから。』このリビング訳は意識ですね。「わたしの力は、弱いその中で実は成就されている。実現されている」というのが直訳です。どうということかと申しますと、「弱さの中で、私の恵みと力は実現されている」のだと。その弱さから脱して何とかかんとかではなくて、その弱さの中で、実は神の恵みと力は実現している。成就しているというのが原文の表現なのです。「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」この「誇る」という言葉も、別のところでは「喜ぶ」と訳されたりしています。

今回そういうことで今日は木内正子姉の遺品の聖書を手がかりにしてご一緒に読みましたけれども、わたしも牧師としても、また兄弟としても、今回のような事に思いがけず出合ったわけですが、もしイエス・キリストを信じる信仰がなかったら、本当に惨めだったろうな一とつくづく思います。この思いがけない災難と言ったらいいでしょうか、その中でもだえ、もっと激しく苦しんだであろうな一とと思いますけれども、幸いなことに、そういうようになることなく過ごすことが許されておりまして。そして召された木内姉自身は、あのような最後でしたけれども、正に弱さ、むごさの極みにおいても、『わたしはあなたと共にいる』との神の御約束の只中にありました。キリストにおける神の恵みと約束をぶち壊すことが出来るような人間の力、悪、罪などはないのであります。

今日のところを読みながら思い出したのですが、福島県の小さな伝道所にいた時に、長

男が高校受験を失敗しました。一つしか受けなかったので、中学浪人した時に、担任の先生が何とこう言ったのです。「お前の父ちゃんは牧師だろう。なのに、何で落ちたんや」と。ご利益ないのかとこういうことなんです。学校の先生がそんなことを言ってはいけませんね。一つ受けたのを落ちたんだから、ご利益なかったのかなんていうことを教師たる者、言ってはいけませんけれども、その先生は正直で、そういうことを言われました。

今回の事件なんかでも、“ どうして毎週教会に通っている人が、そんな目に遭うのですか ” とこういうふうな疑問を持たれた方もあると思います。そんなことをわたしも考えなくはないですけれども、もしこれが、本人が犯した罪の報いを受けたというふうなことならば、私自身もこういふふうに生きてはおれないだろうし、この世に生きている人は皆罰を受けて、皆滅亡しているはずだなーと思います。ですから因果応報という考え方はある部分では当てはまるのですけれども、この人間の現実はそのようなことからはみ出す事例がいくらかもあるわけです。どの人も昔からこういう問題にはぶつかっているわけです。

ヨハネによる福音書9章(184頁)をご覧になりますと、“ 生まれつきの盲人をいやす ” という見出しのところで、イエス様と弟子たちが通りすがりに、生まれつき目の見えない人に出会うわけですね。物乞いをしていたのでしょう。「弟子たちがイエスに尋ねた。『ラビ(先生) この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。』 これはイスラエルであろうが、どこの国であろうが、ヨブの3人の友達たちもそうでした。ヨブのところに行って来て、「あなたがこんな目に遭わされるのは、何かあなたに非があるからではないか」とそういうふうに言いますけれども、ヨブは承知しなかったのですね。 イエスはお答えになった。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。』」

この「神の業」というのは「神の恵み」と言い換えてもよいと思いますけれども、こういふふうにはイエス様はおっしゃって、この後、イエス様はこの盲人の目を開かれるという話に展開するわけでありませう。

今日、日曜学校ではダニエルのことを学んだのです。ダニエルという人はイスラエルの青年で、イスラエルが滅んだ時、バビロンに連れて行かれました。そしてそこで教育を受けて、外国のバビロニア帝国で総理大臣になった人なのです。それをねたんだ諸大臣が、「今からひと月、どんな願い事も、王様に対して願う。それを破る者はライオンの穴に投げ込むというお触れを出してください」と嘆願します。王はお触れを出します。しかし、ダニエルはいつものように朝昼晩エルサレムの方角に向かってお祈りをしたというので、捕らえられてライオンの穴に入れられるという話です。王様はダニエルを愛していましたので、そうしたくなかったのですが、自分が出した命令ですから仕方なくダニエルを穴になげます。それでも夜眠れなくて、朝一番に部下を遣わして、ダニエルの様子をうかがわせます。今日は絵本で話をしたのですが、ダニエルはその地下のほら穴で、ライオンと仲

良くしているという絵になっていました。その後バビロニアの王は国中に命令を出して、「ダニエルが信じている神が、生きている真の神である。この神が永遠におられるのだ。皆、この神を恐れ、敬え」というお触れを出したという話で、そこを子供たちと一緒に読んだのですが、実はその前にバビロニア王は巨大な金の像を造り、「これを拝まないものは燃える炉に投げ込む」というお触れを出した時、ダニエルの三人の友人はその命に従いません。そして彼らはこう言います。「私たちの神は必ず私たちを守ってくださいます。たとえそうでなくても、わたしは偶像の神は拝みません」と言っているところがあるのです。「たとえそうでなくても」。この一語に込められた意味と信仰は深甚です。「たとえそうでなくても」。ご利益はある。たとえそうでなくても。彼らは禍福を超えた神に出会っているわけです。

「このサタンの使いを取り除いてください。去らせてください。癒して下さい」とパウロは繰り返し祈りましたが、それに対する神様の答えは、「いや、治すまい。しかし、わたしはあなたと共にいる。それで十分ではないか。私の力と恵みはその弱さの中で、もう既に実現しているのだ。」そういう恵みと力と見守りの中に私たちは今あります。そして、私たちの終りがいつ、どういう仕方になるか、それは誰も予測できません。

しかし、たとえどのようなことであっても、主と共にいます。『わたしはあなたがたの年老いるまで変わらず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。』この神様の御言葉、御約束、これは不変、不朽、不動であります。いよいよ私たちも神様が私たちの内に宿ってくださるように、その弱さをも大いに誇る、そういう信仰へと導かれたいと思います。

お祈りいたします。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたは私たちの苦しみを見、叫びを聞き、そして私たちの痛みを知ってくださるお方であることを覚え、心から感謝いたします。

私たちが今この世にある時も、この後も、死ぬ時も、死の後も、とこしえに生きて力と恵みに満ちておられるあなたの前に、あなたの許に、見守りの真下に、私たちがいることを覚えて感謝いたします。

どうか様々なことで苦しんでいる人たち、躓いている人たち、病の中にある人たち、いわれない差別の視線を受けて苦しんでいる人たちに、どうかあなたによる平安と喜びと自由をお与えください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン

